論説

セザンヌと『知られざる傑作』（Ⅳ）

佐野栄一

セザンヌとゾラの絵画観

セザンヌとゾラが、活発な文通を始めるようになるのは一八五八年からで、同年二月のゾラの上京がきっかけであった。

当時、ゾラ家は貧窮の底にあえいでいた。一八四七年に父フランソワが亡くなり、家計収入を断たれた母は、生きるために祖父母と懸命に生活をやりくりしてきたが、五七年十一月、今度は祖母が亡くなり、家族は息子と祖父の三人だけとなった。祖母がいなくなって家事の負担すべてがかかるようになったものの幾分身軽にもなった母は、ついに生活の活路を見出すべく、エクスからパリに出ることを決意した。

ゾラの父フランソワはイタリア人だった。[注1] 現在「ゾラ湖」の名で呼ばれるエクス東郊の貯水ダムとそこから町まで水を引くための水路建設を企画し、その工事を指導した有能な土木技術者だった。万能の才を持つ人で、

士官学校を出て砲兵少尉から大尉に昇進した後軍人をやめ、余暇に研究していた学問を基に土木技師となった。常に大きなヴィジョンを描く生来の情熱家で、活動の範囲が広く、波瀾に富んだ生涯を送った。彼が思い描く大きなプランを実現するには、行政との関わりが必要だったから、フランソワは努めてパリに人脈を築いていた。

ゾラの母は、夫が築いたその人脈を頼った。職を見つけ住まいを見つけ、なんとか生計の目途を立てると、母は上京後三月にして、息子と祖父に直ちにパリに来るよう連絡をよこした。父の友人だった弁護士ラボの計らいで、ゾラを奨学生としてパリの名門サン＝ルイ校に転校させることが可能となったからだった。こうしてゾラの上京が決まった。それは、ゾラにとってもセザンヌにとっても、運命がもたらした突然のつらい別れだっただろう。

不意にやって来た親交の途絶は、互いにとって互いがどれほど大切な存在であるかを思い知る機会になった。セザンヌはゾラに「君がエクスを去って以来、暗い悲しみがぼくを打ちのめしている。嘘じゃない、本当だ[注2]」と書き、またゾラの方も新生活にともなう混乱が収まると、「ぼくは悲しい、数日来とても悲しい。（……）それでも、時折気持ちが明るくなるのは、君とバイユのことを考える時だ[注3]」と、さらに四ヶ月後には、「ぼくはパリに疲れた。外出することもほとんどない。できることなら、君の近くで暮らしたい[注4]」と書いている。二人は、友を失って突然心に開いた大きな空隙を埋めるために、暇を見つけては長い手紙を書いた。詩の好きなセザンヌは、主に自分の心境を表す長詩を幾度も書き綴って送った。豊かな想像力に恵まれ、詩才に富み、ゾラとともにミュッセに夢中になった文学肌のセザンヌの手紙は、ゾラを大いに喜ばせ慰めたに違いない。一方、ゾラは、パリでのつらい情況を簡単に知らせつつも、自分のこと以上にセザンヌの悩みに寄り添い、とりわけ彼に画家への道を歩ませるべく、激励を続けた。貧しいゾラが、再びエクスに戻り以前の幸福な青少年期を取

り戻す道は閉ざされていた。彼にとってかつての夢のような日々を取り戻しうる唯一の方法は、セザンヌが画家になるために上京し、また共通の友バイユもパリで学問するために加わって、新天地で再び三人組をおこすことだったろう。だから、ゾラは、自分のことよりもセザンヌについて、またセザンヌに関わることについて話題にし、それにともなう意見や友としての忠告を書いた。絵画についても、書くのはもっぱらゾラの方で、セザンヌは耳を傾けるだけで、返信をとおして自らの絵画観を述べることも、ゾラの見方に反論することもなかった。今に残る二人の書簡を読む限り、興味をリードしているのも、行動をリードしているのもゾラのようだった。

「ぼくらは、詩の話ならよく手紙でするけれど、彫刻とか絵画とかという言葉は、全然とは言わないまでも、ほとんど出てこないね。これは重大な忘却だ、ほとんど犯罪だ。そこで今日は、その埋め合わせをしたいと思う。[注5]」

二人の手紙に初めて芸術論が現れるのは、一八六〇年三月二十五日の手紙で、ゾラは、こう前置きした後、まず最近修復を終えて彼が眼にする機会を得た十六世紀の彫刻家ジャン・グジョンの泉のすばらしさについて語っている。グジョンの泉については、ほぼ同じ頃ルノワールもたまたまそれを目にして、出会いの感動を、「それを見るや、私はビストロで昼食を食べるのを諦め、隣の肉屋でソーセージを買って、自由になる時間を『無垢な人々の泉』の周りを回って過ごした。ジャン・グジョンに対して特別な愛着を持つようになったのは、おそらくこの遠い昔の出会いの思い出があるせいだと思う[注6]」と、後年、修業時代を回想する中で述べている。

おそらく、ゾラの感動もまた同じようなものだったろう。

アリイ・シェフェール
『ダンテとウェルギリウスの前に現れたパオロとフランチェスカの亡霊』

グジョンの泉に続いて、ゾラは、いっそう熱を込めて、当時まだ世を去ってまもなかった画家アリイ・シェフェール（五八年六月十五日死去）について語っている。シェフェールは伝統的な絵画技法を完全に習得した画家で、父も著名なオランダ人画家だった。しかし、十六歳の時に父が死去、やむなく未完の才能を完成させるために、母の指示でパリに出、ゲランのアトリエに入って修業を積んだ。作風はややロマン主義的で、しかもしばしばそこに神秘主義的な雰囲気を漂わせる。おそらくゾラは、そこにシェフェールの美の独創を見、すっかり魅了されたものと思われる。当時のゾラの絵画の見方は、主題を重んじ、そこに表現された絵画特有の詩情や文学性に価値を置くごくオーソドックスなものであり、数年後にアカデミー絵画を痛烈に批判する態度とはまったく異なっている。

「レアリストという言葉は何を意味しているのか？　詩情（ポエジー）のない主題しか描かないことを誇ろうというのだろうか！　どんなものにだって詩情（ポエジー）はある、ものすごくつまらないものにだって、花と同じように。でも、もしかすると、自然をそのまま写し取ることが重要だからというのだろうか？　しかし、詩情（ポエジー）が必要だとあれほど叫んでいたのだから、そのことは、自然は平板なものだ、ということを意味することになる。だから、そこに嘘がある。―こんな話をするのは君のため、わが友人殿のため、未来の大画家様のためだ。芸術は一つだよ。スピリチュアリストとか、レアリストとかは、言葉の問題でしかない。詩情（ポエジー）こそが重要なんだ。詩情（ポエジー）がなければ飛躍はない。[注7]」

こうゾラは、シェフェールを賛美した後、当時前衛であった写実主義（レアリスム）絵画に対する反対論を述べている。ゾラが性急な論理展開で言わんとしていることは、対象を単にありのまま写し取るのはつまらないことで優れた絵にはポエジーがなければならない、ポエジーはあらゆるものに見出しうるものであり、芸術家は芸術家である限りそれを分かっているはずだ、だが、レアリスムはポエジーを忘れて対象の平板な描写に堕落している、ということであろう。レアリスムが、アカデミー絵画に反旗を翻して、神話や聖書の世界ではなく現実社会をモチーフに、あるいは眼前の風景をモチーフに制作を始めたことは革命的なことだったが、当時のゾラにはその意味が充分につかめていない。何よりポエジーに惹かれるゾラは、セザンヌに、いま流行のレアリスムに毒されるな、と言わんとしており、心に宿った絵画的詩情を自由に自在に表現できるようになるためにデッサンに懸命に励むよう忠告している。つまり、それは「レアリストになるためではなく、ジャン・グジョンのような、アリイ・シェフェールのような芸術家になるために[注8]」なのである。

さらに同年四月十六日、ゾラは、しばしば悲観に陥るセザンヌを励ましつつ、次のように絵画について語っ

ている。

「君は自分自身に対する判断を間違っていると思う。既に言ったことだが、芸術家の中には、二人の人間がいる。詩人と職人だ。人は詩人に生まれて、職人になる。君は、人が欲しくても持つことができない才能のきらめきを持っているのに自分を嘆いている。成功するには、手を鍛錬しさえすればいい、職人になりさえすればいいというのにだ。ただし、二つのことだけは言っておいて、この話は終わりにしよう。このあいだ、レアリスムには気をつけろ、と言ったね。今日はもうひとつ危険なものを付け加えておきたい。商売だ[注9]」

またこの十日後、ゾラは長文の手紙を書いて、より詳細に自己の絵画論を展開する。

「ぼくが絵画を見ても、せいぜい白と黒の違いがわかる程度だから、おこがましくも筆の動かし方の良し悪しを断ずることなどできないのは明らかだ。ぼくの言えることは、主題は好きかどうか、絵が全体として何か偉大な良きものを夢想させるかどうか、美への愛が創作の中に息づいているかどうか、ということに限られる。要するに、ぼくは、筆さばきがどうこうということとは無縁に、芸術や、作品を領している思想を問題にして話す、ということだ。だから、慎しみある物の言い方をしようと思っている。（……）君は、ぼくとは逆に、想像力に従って画布の上に様々な色を置いてゆくことがどれほど難しいかよくわかっている。絵を一目見て、君は筆さばきに大いに関心を持つことは理解できるし、任意の筆の入れ方や、選び抜かれた色などの素晴らしさに感嘆してしまうこともよくわかる。理想やきらきら光るものが君の中にあって、君は、自分のものになっていないその形（フォルム）を探し求めている。だから、君は、いたるところでそうしたものに出

会っては、心からそれに感嘆する。しかし、注意しなければいけない、この形（フォルム）というものがすべてじゃないんだ。君がどう理屈をつけようが、形（フォルム）のまえに理想が表現されなければならない。思うに、君にとって、絵というものが、単に画布の上に置かれた、あるいは撒き散らされた色であってはならない。君は、この効果はどういう方法を使って得られたのか、とか、どんな色が使われているのか、といったことばかり探究するようなまねをしちゃ駄目だ。全体を見て、作品はしかるべき完成に達しているか、この絵描きは本当に芸術家か、そういうことを自らに問いかけてみるべきだ。俗人の眼には、傑作と駄作との違いはごくわずかだ。どっちにも白や赤などいろいろな色があり、筆の動きがあり、画布があり、額縁がある。両者の違いは、言葉にできないものの中にしか、またポエジーの中にしかなく、それを明らかにできるのは美意識だけなんだ。（……）

さらに、君のために言うわけじゃないが、もし君に天分があるなら、もちろんぼくはそれを固く信じているが、君は、今ぼくが少々青臭い言い方で話した相違というものをはっきり打ち出しさえすればいいんだ。天才はみな、理想と独自の形を持って生まれる。これは、分離しようとするとすべてが無に帰してしまう切っても切れないものなんだ。（……）しかし、厄介なことは、つまらぬ画家は、理想は持っていなくとも、多くの場合自分の形（フォルム）は持っているということだ。だから、形（フォルム）ができてしまうや、その絵は深刻な落とし穴となる。（……）認めざるを得ないことだが、こういう絵はきれいなんだ。だから、もしより深く見ることができなければ、価値のない作品を素晴らしいと思い始め、おそらく、それを真似ることも始める。ぼくはよくわかっているつもりだが、自分の気儘に筆をとるのは愚か者だよ。もし、ぼくが、たとえ間違ってにせよ、それを恐れたことがある、と言ったら、君は怒るかい、友人として君にこう言ったら、怒るかい、つまり『気をつけろ！　芸術を、崇高な芸術を考えろ。形（フォルム）ばかり考えてはならない。形（フォルム）だけなら、売り絵にす

ぎないからだ。理想を思え！　美しい夢を作れ。形（フォルム）は制作とともにやって来る。であれば、君の作るものはみな美しく、偉大なものとなる』。以上、これが、これまで君に言って来たことであり、これからも常に繰り返し言うことだ。[注10]」

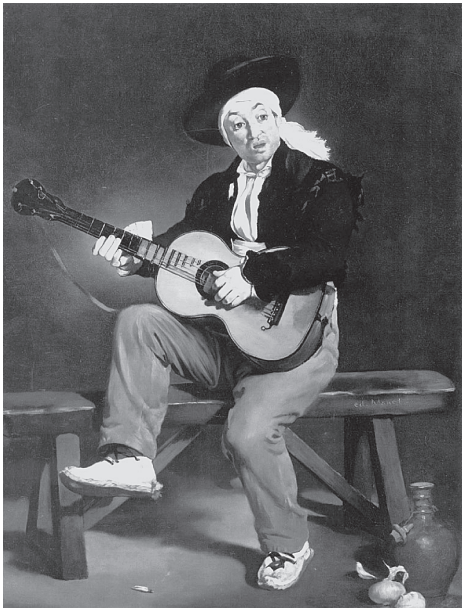
アリイ・シェフェールの絵に対する高い評価、画像（イメージ）に込められた思想とポエジーの重視、それがとりもなおさず意味する主題の重視、これらのことから推察されるのは、この頃のゾラは、クールベに代表されるような写実主義にはまったく意味を見出さず、画像（イメージ）が感性と想像力を強く刺激する絵、主題が独自の詩情を漲らせる文学的な絵を評価していた、ということである。しかも、この好みは、どうやら、多少のずれはあれ、セザンヌにも伝搬したかあるいは共有されていたことが、この二年後に書かれたセザンヌから友人ユオに宛てた手紙に読み取れる。

「言うも素朴な話だけれど、ルーヴルとリュクサンブールとヴェルサイユを見てきた。君も知ってのとおり、これら美麗な建物には、長広舌な絵が詰まっている。それは素晴らしくもあり、空威張りの感じでもあり、びっくり仰天でもある。こんな言い方をしたからって、パリジャンみたいになった、とは思わないでくれ…。

それから、サロンも見てきた。若い心には、芸術に目覚めたばかりのこどもには、思ったままを言うなら、本当にいいものがあるのはこちらの方だと思う。なぜって、そこでは、あらゆる美意識とあらゆるジャンルの絵画が出遭い、衝突し合っているからだ。ここでぼくは君にそれらについて仔細に物語ることもできるけれど、そうすれば君は眠ってしまうだろう。[注11]」

メッソニエ『トランプ』（1861年）

こうセザンヌは初めて主要な美術館とサロン見たことを報告し、感想を詳しく述べる代わりに、サロンを見て高揚した気持ちを詩に表している。その中で彼が名を挙げている画家は、イヴォン、ジェローム、アモン、グレーズ、カバネル、ミュレール、クールベ、ギュバンの八人で、レアリストのクールベと、歴史の中に埋没して今やどういう絵を描いたのか日本にいる著者には調べのつかないグレーズとギュバンを除けば、みなアカデミスムの画家である。また、詩の後に、セザンヌは特に、「すばらしいメッソニエがある」[注12]と、アカデミー歴史絵画の巨匠の名を挙げ、さらに追伸では、「偉大なるG・ドレがサロンにとてつもない絵を出している」[注13]と異彩を放つ想像力の巨人を称えている。つまり、セザンヌが画家になろうと初めてパリの地を踏み、画塾に登録し、著名な美術館を訪ね、サロンを見て歩いたとき、彼は、幾分好みに違いはあったとしても、ゾラと同様に、主題を重視し、その表現のために正確な素描を基盤とする、描法においてはまったくアカデミックな絵画に魅了されていた、ということで



マネ『ギタレロ』

ある。

この六一年のサロンには、ドービニーが五点、ミレーが三点、ファンタン＝ラトゥールが一点、そしてマネが二点入選、展示されていた。そのマネの二点のうちの一点は『ギタレロ』で、概して新しい絵画に好意的とはいえないゴーティエも高く評価し、この年のサロンで大いに話題となったために、前代未聞の見やすい位置への掛け替えが行われていた。この絵の、伝統に反した斬新な描法と鮮烈な色彩は、重厚でくすんだ絵が並ぶ中で、強烈なインパクトを放っていたに違いなく、後年のゾラの小説『制作』に描かれたサロンの様子から当時の雰囲気を想像すれば、おそらく、展示室では、絵の前で毀誉褒貶する群衆があふれ返っていただろうと思われる。しかし、セザンヌは、このマネを含め、後の印象派につながる画家たちの名を誰一人挙げていない。また、自然そのものをモチーフとする新しい絵画の胎動に興味を示した跡も見られない。

ゾラもセザンヌも、いつから絵画観を改めたのか、どちらが先に変わったのか、その原因は何なのか、そこには残念ながら明確に時日を区切りうるものも、またそれを証拠立てうるものもない。ただ、残された資料から推測しうることは、当初二人は、当時の一般的な教養人と大差ない絵画観と絵画趣味を有し、その枠組みの

中で絵というものを考えていたらしいこと、そして二人の芸術論をリードしていたのはゾラの方であろう、ということである。

言うまでもなく、この後まもなく、二人はそれぞれ大きな変貌を遂げる。絵画観だけではない、人生そのものが大きく変わる。ゾラにとってもセザンヌにとっても二十代前半のパリは、自己の芸術形成においても、思想形成においても、心と感情の経験においても、人との出会いにおいても、生涯にけっして消えない刻印を刻んだ激動の数年間だった。しかも、初めて二人の友情が深刻な危機に瀕したときでもあった。この波瀾の「青の時代」を乗り切って、ゾラは天職を得て華々しい活動を開始することになるし、セザンヌはついに退路を断って画家であるしかない道を歩み始める。二人の変化のすべての鍵は、この数年間の中にあるだろう。

セザンヌとゾラの友情

画家セザンヌは、ある意味でゾラが生んだと言ってもいいかもしれない。もしゾラがパリに来なかったならば、もしゾラがセザンヌの才能を信じ称賛し続けていなかったならば、もし手紙で繰り返し粘り強く画家になるよう説得を続けていなかったならば、セザンヌは上京する勇気も、その道に入る決意も持ち得なかったに違いない。画家セザンヌの誕生にとって、ゾラの友情は不可欠の要素と言っていいだろう。

しかし、ゾラが、セザンヌを画家にすべく、その意気を高め支え続けることは、並大抵のことではなかった。セザンヌはきわめて特異な性格の持ち主である。気分が不意に転換して、自分で自分を制御できなくなる。親友に対してもである。たとえばある時、切っても切れない三人組の一人のはずのバイユが、久々にマルセイユ

からエクスに戻ってセザンヌを訪ねてみると、彼の態度がひどく冷淡で不機嫌であった。その理由がまったくわからぬバイユはセザンヌの態度に深く傷つき、友情には亀裂が入った。それをバイユはゾラに訴えた。ゾラは、三者一体の大切な友情を修復するために、バイユを宥める一方、扱いに注意を要するセザンヌには、諭すのではなくただ事態を知らせた。彼はセザンヌの性格をよく呑み込んでいたから、批判や非難と感じ取られるようなニュアンスがあると、すべてがぶち壊しになると知っていたのである。だから、自分が何をしたかよくわかっていないセザンヌに、ただその振る舞いの他者への意味を説明してやった。それに対して、セザンヌからは次のような返事が返って来ている。

「君の手紙だと、バイユとぼくらの友情が衰微すると心配しているようだけど、おお、そんなことはない。だって、クソ、あいつはいい奴なんだ。でも、ぼくは、知ってのとおり、こんな性格だから、自分が何をやってるのか自分でもよくわからない。だから、もしぼくが何か悪いことをしたようだったら、彼に許してくれるよう伝えてくれ」(注14)

おそらく、セザンヌは、自分の中に何かを抱えると、そのことだけに頭が一杯になって、自分を客観的に見ることも、他人に配慮することもできなくなる。そのため、彼と親しい人間でも、その性格や彼が捉われている情況を充分に了解していなければ、二重人格のように見えてしまうおそれがあった。ゾラはそうしたセザンヌの性格を、おそらく誰よりもよく理解し、なおかつ、書簡集を読むと感動を覚えるほどに、セザンヌという人間の本性を愛し深く信頼していたのがわかる。ゾラは、相手がまるで恋人であるかのようにセザンヌを懐かしみ、「もしセザンヌの奴がこっちに来られたら、ぼくらは小さな二人のための部屋を借りて、ボヘミヤンの

生活を送るのだが[注15]」と、一緒に暮らすことを夢見ていた。

ところが一八六一年四月、粘り強いゾラの説得と激励が功を奏して、セザンヌが上京し、実際にその夢の実現が可能な状態になった。すると、情況は思いもよらない展開となった。ゾラは作家になる夢を、セザンヌは画家になる夢を実現すべく、共に支え合って愉快に生きてゆくはずだった。にもかかわらず、セザンヌは、ようやくパリでの日常といいうる生活ができあがった頃、ゾラとあまり一緒にいようとしない、というよりもむしろ、ゾラには彼が自分を避けているとしか思えないような具合になった。

セザンヌの上京後二ヶ月経った一八六一年六月十日、ゾラはバイユに次のように書いている。

「ぼくはセザンヌとほとんど会わない。ああ！　エクスにいる頃とはもう違うんだ。ぼくらが十八だった頃とは、自由で、将来に何の屈託もない頃とは。生活するのに必要な様々なことや、別々の仕事が、今、ぼくらを隔てている[注16]」

セザンヌがゾラを避けていた理由は詳らかでない。ただ、この頃、セザンヌは、毎日午前中、アカデミー・スイスに通ってデッサンに打ち込み、午後は午後で、郷里の先輩画家ヴィルヴィエイユのところに通って、やはりデッサンの勉強をしていた。ヴィルヴィエイユは、画学生時代、エクスの誉れである郷里の画家グラネから直に指導を受けた経験を持っていた。グラネは、アングル同様、フランス新古典主義絵画の巨匠ダヴィッドの著名な弟子の一人であったから、系統から言えば、グラネの弟子ヴィルヴィエイユは完全にアカデミスム本流であった。この彼からセザンヌはアドバイスを受けつつ、父の希望に沿うために、またおそらくは当時考え

ていた自分自身の絵画のために、国立美術学校に入学したいと強く望んでいたはずである。ところが、さきに述べたとおり、セザンヌは不器用だった。画塾で、彼のデッサンは国立美術学校から通ってくる画学生たちに馬鹿にされ、笑いものにされた。自分自身、おのれの不器用に苛立ちを感じ、自信を失い、おそらくこの頃、将来に対する暗澹たる気持ちが渦巻き始めていたにちがいない。ゾラの手紙にあるとおり、上京後まだ二ヶ月ほどしか経っていないのに、彼は故郷に帰ることばかり考えるようになっていたのである。

とすれば、その才能を信じてパリに引っ張り出し、将来の夢を語り、いま彼が陥っている深刻な自己への疑念など何も知らず、ただそれをいつものごとく修練が不足しているがゆえの自信のなさと受け止め、相も変わらず熱心に励ますゾラを、セザンヌは鬱陶しくはならないだろうか。ゾラがセザンヌに寄せる大きな期待や将来に対する楽観、そして夢のためにはパリにいるべきだと説くまったく筋の通った理屈に、セザンヌは強い苛立ちを覚えないだろうか。

一方、ゾラの方はどうだったか。彼は画塾でのセザンヌの様子をまったく知らない。セザンヌがどういう困難に直面しているか推測をする条件そのものがない。ゾラは、セザンヌが絵で悩むことは、自分が創作において悩むのと同じく、才能が受けねばならない個人的な試練の問題であってまだ将来を疑う問題ではないと、また、その試練に耐えるためにこそ、互いに支え合いたい、と思い続けていたのである。にもかかわらずセザンヌは、ここにまでたどり着くためにゾラがどれほど努力したかなどすっかり忘れたかのごとく、全然ゾラと一緒にいようとしない。ゾラにはその理由がまったくわからず、ただ戸惑い、失望し、そしてとうとうセザンヌの性格を疑うに至った。

「これが、ぼくの望んでいたものなのか？　―ポールは、相変わらず、ぼくが中学以来知ってのとおりの、

この上なく気まぐれな少年だ。彼が全然その独自性を失っていない証拠を示すには、パリに着いてまだいくらも経たないのに、もうエクスに帰る話をしている、と言えば十分だろう。彼の上京のために、そしてそのことをいろいろ心配して、三年も戦ったというのに、そんなことはどうでもいいことのようだ！　こんな性格の彼、ほとんど予測もできず、ほとんど理由もなくころころ方針を変える彼を前にしては、実のところ、ぼくは何も言わず、理屈を飲み込むしかないよ。セザンヌに何かをはっきりわからせることは、ノートルダムの塔にカドリーユを踊るよう説得するようなものだ。彼は、たぶん、わかった、とは言うが、少しも譲りはしないだろう。歳と共にますます頑固になっていると思う。（……）彼は、ごわごわのただ一枚の布で作られていて、手に取るとすごく固いんだ。彼を折り曲げることができるものは何もないし、譲歩を引き出すことができるものも何もない。自分が考えていることを議論することさえ嫌なんだからね。議論を恐れている。まず、話すのは疲れる、次に、もし相手の言っていることが正しければ、意見を変えなくてはならなくなるからだ。こうやって実人生の真っただ中に彼は今いるわけだが、そこにいくつか自分の考えを持ち込んでいて、それを周りが変えようとしても、変えられるのは本人の判断だけなんだ。つまるところ、いつも君らが言ってるように、議論を恐れて世界最高のこどもになってる。（……）たまたま、彼が反対意見を主張する成行きになって、しかもその意見は以前君らが批判していたものだったりすると、彼は、よく考えもせずに、激高し出して、この問題を何もわかってない、などと叫び、次に全然関係ないことに飛躍する。実際、彼と議論してごらんよ、と言うより、こんな性質のこどもと話すだけでもいい。君らは相手からわずかの譲歩も得られず、ただただものすごく変わった性格を観察するだけに終わるだろう。ぼくは、歳月がやがて彼に何か変化をもたらすだろう、と期待していた。しかし、彼は、ぼくが何も言わないできた彼そのままだ。だから、ぼくの対応方針はごく単純になる。彼の気まぐれな性格に逆らうようなことはけっしてしないこと、

彼に何か働きかけをするにしても、せいぜいとても婉曲な忠告にとどめること、ぼくらの友情が通い合うように彼の善良な性質に自分をゆだねること、けっして無理に彼の手を取って握手しようとしないこと、一言でいえば、完全に自分を消し去ること、いつも陽気に彼を迎い入れること、うるさいと思われないように彼を求めること、そして、彼がぼくらの間に望んでいる親密さの大きいときも小さいときも、もっぱら彼の喜びに自分を合わせること、以上のことだ。こんな言い方をすると、きっと君は驚くだろうね。しかし、これが正しいんだ。ぼくにとってポールは、自分をわかってくれ評価してくれるいつも善良な心を持つ友だ。ただ、人にはそれぞれ生まれつきの性質があって、もしその友情を失いたくないなら、ぼくはおとなしくその人の気質に自分を合わせなければならないと思う。もし君との友情を保つためだとしたら、それはたぶん論理を用いることだ。ところが、彼にそれを用いると、すべておじゃんになる」[注17]

ここにはゾラの、友に求めて得られないがための怒りと恨み、強い不満と不信、悲しみと無念、屈辱と諦め、にもかかわらずそれでもなおかつ相手を愛し相手を求めている哀れなほどの心情の乱れが現れている。と同時に、如何に彼がセザンヌを理解し、日頃一筋縄にはいかないセザンヌと親密でいるために繊細な心配りをしているかが現れている。曰く、「彼の気まぐれな性格に逆らうようなことはけっしてしないこと」、「とても婉曲な忠告にとどめること」、「いつも陽気に彼を迎い入れること」、「うるさいと思われないように彼を求めること」、そして「望んでいる親密さの大きいときも小さいときも、もっぱら彼の喜びに自分を合わせること」と。これほど献身的な友を見出すことは世にも稀なことであり、あたかも恋人に尽くすかのようである。実際、気まぐれな男の愛が自分に戻ってくると途端に明るくなる娘のように、ゾラは、セザンヌがパリの南西二十キロほどのところにあるマルクシスに写生に出かけて戻ってくると、しばしセザンヌが画塾の憂さを忘れたせいか、

その態度がとても優しくなった、と大喜びしている。そして前言を撤回してこう述べる。

「ぼくは彼という人間を判定しようとしたね。誠実に話したつもりではあるけど、結局のところ、真実とは言えない結論を引き出したことを後悔している。ポールは、マルクシスから戻ると、すぐぼくに会いに来た。前より優しくなっていた。これ以後、ぼくらは一日六時間一緒にいる。場所は彼の小さなアパルトマンだ。その部屋で、彼はぼくの肖像を描く。彼が描いている間、ぼくは本を読んだり、おしゃべりしたりする。そして仕事にうんざりしてくると、たいていリュクサンブール公園にパイプをふかしに行く。ぼくらの話題はあらゆるところにころころ転がるけど、特に絵の話をする」[注18]

だが、ゾラとセザンヌの蜜月はひと時でしかなかった。さきに引用したとおり、これから数日経ったある日、ゾラがセザンヌの部屋に行ってみると、彼はエクスに帰るべく荷造りをしており、いったんは翻意したものの、結局はパリを去った。この間に、つまりゾラの説得を拒否してセザンヌが決定的に帰郷を決める間に、おそらく二人にはこれまでにない真剣な口論があったものと推測される。セザンヌの性格に配慮して口を慎んできたゾラも言うべきことは言ったに違いなく、セザンヌも普段は口にすることのない彼への不満をさらけ出したに違いない。セザンヌがパリを去った一八六一年九月から翌年一月までの約五ヶ月間、二人の間には完全な沈黙が訪れているのである。それまでの二人の友情を思うとき、この空白の五ヶ月間は、まったく尋常ではない。

ゾラはこの間、自分からはいっさい手紙を書かなかった。セザンヌの詩情を湛えた才能を愛し、その価値を信じ、共にあって共に芸術家への道を歩むことを最上の喜びとも生きる活力ともしてきたゾラが、セザンヌに

もはや一通の手紙も書こうとしなかったのである。彼の友情が受けた傷は余程深かったに違いない。

結局、この沈黙に屈して、その性格からは困難とも思える和解を自ら求める行動に出たのは、セザンヌの方だった。セザンヌにとっても、ゾラは、やはりかけがえのない友だったのである。

その和解を求めるセザンヌの手紙への返信に、ゾラは次のように書いている。

「ぼくらの友情にとって、パリは何の価値もなかった。もしかすると、ぼくらの友情が愉快に存続するにはプロヴァンスの太陽が必要なのかもしれない。ぼくらの関係を冷ややかにしたのは、おそらく不幸な取り違えであり、間違った状況判断であり、あまりにも熱を帯びたために心を傷つけてしまう言葉だろう。でも、それが何なのかなど知らないし、知りたくもない。要は、汚辱をかき回せば、どちらも手は汚れる、ということだ。ともあれ、ぼくは君をずっと友と信じているし、君も、ぼくには下劣な行為などできないと考え、これまで同様に評価してくれていると思っている。[注19]」

互いに傷付き一旦は絶交となったものの、おそらく、相変わらずゾラは、セザンヌの才能とその性格の根にある善良さを愛し、信じていた。だから、互いに尊重し合いながら一緒にいられるなら、またきっと愉快な活気ある友情が戻ってくると希望を抱いた。しかし、かつての友情の天国的な無邪気さは、もう取り戻しようがなかっただろう。二人はともに、どう夢に向き合おうとも、これから実人生を生きていかねばならなかった。自分の身を処してゆかねばならなかった。その時二人の間には大きな隔たりがあった。ゾラの手紙には、セザンヌがどう彼を傷付けたかを窺わせる次のような言葉がある。

「君はぼくに働くよう促していたね。あんまり執拗に言うものだから、余程ぼくは働くことが嫌なんだと受け止められているのかもしれない。しかし、君にはぜひ次のことをわかってほしい。ぼくの強い希望、毎日毎日ぼくが考えていること、それは自分の場所を見つける、ということなんだ。そして、絶対嫌だと思っているのは、家に閉じ込められることだ[注20]」

ゾラは当時、人生のどん底にいた。彼がセザンヌの上京を心待ちにし、彼との友情をまるですがりつくように大事にした原因の一つもそこにあった。既に述べたとおり、ゾラ家は、父が死に、祖母が死に、家計が立ち行かなくなって母は生活のためにパリに出、そのためにゾラと祖父も上京することになった。一家は、母のおかげでかろうじて最低限度の生活を営んでいたが、将来には何の展望もなかった。

かつて、父の仕事で一家がエクスにやって来た時、ゾラは学校でよそ者として級友たちからのけ者にされた。その孤独な彼に手を差し伸べてくれたのが勇気あるセザンヌだった。ゾラは彼のおかげでエクスの水に馴染むことができ、バイユという新たな共通の友も得ることができた。そして彼らのおかげで精神的安定を得たゾラは、自分の能力を十全に発揮するようになり、まもなく彼らと主席を争う秀才となった。

ところが、一八五八年二月、突然パリに転校させられると、ゾラは、再びエクスでのように、一人の友もいない孤独な田舎者になった。成績も六十人中二十位程度の、特に目立たぬまあまあの生徒に落ちた。母は、息子の沈んだ様子を見て、苦しい家計から短期のエクス滞在の金を捻出し、友のところに行かせてくれたが、楽しい夏休みも束の間、パリに戻るとゾラは不運にも腸チフスにかかり、一月半病臥の床に就いた。成績はまたたくまに落ち、いっそう学校から足が遠のき、結局、翌年八月、大学に入るための理科バカロレアに落第、続いて十一月、今度は文学バカロレアに変更して受験したものの、それにも落ちた。そのために、彼の奨学金は

取り消しとなり、十一月末、ゾラはリセを退学せざるをえなくなった。こうしてその年が暮れ、どこにも行くところのない一八六〇年が始まったのだった。

「ぼくは打ちのめされている。（……）将来のことを考えるが、あまりにも、あまりにも暗くしか見えないので、その恐ろしさに後ずさりしてしまう。ぼくには財産もなく、仕事もなく、あるのはただ失望だけだ。ぼくの近くには、ぼくを支えてくれようとする人など誰もおらず、女もなく、友もない。あるのは、いたるところ無関心と軽蔑だけだ。はるか遠くを眺めても、ぼくの目に映るのはこれだけだ。それがひどくぼくを悲しくさせる。[注21]」

ゾラは深い失意に沈んでいた。少しの誇張もなく「打ちのめされて」いた。しかし、ゾラ家では、彼をただ遊ばせておく余裕などなかった。奨学金の時と同様、母は再び亡き父親の友人ラボを頼り、ゾラにサン・マルタン運河のドックで税関の雑事務をする仕事を見つけてきた。四月から、ゾラは否応なくそこに勤めた。しかし、この仕事は、月給わずか六十フランの、およそ彼の知性など必要としない人間機械のごとき仕事だったため、ゾラはすぐに嫌気がさし、わずか二ヶ月で職を投げ出した。

それから彼はボヘミアンになった。詩を書き、短編を書いたが、それは売れるようなものではなく、おそらく母と衝突したためであろう、二月、家族と離れて粗末な屋根裏部屋に引っ越している。それから間もなく、ゾラは、ベルトという「お遊び娘 fille à parties」と知り合って、しばらく一緒に暮らした。ベルトは、概ね、自伝的小説『クロードの告白』で描かれているような、あるいは『制作』に登場するような、今のことだけしかないデラシネの享楽的な尻軽娘、あるいは「娼婦」だったと推定される。小説にあるように、彼は、たまた

ま寝場所をなくした彼女を拾ったのかもしれないし、はじめから住所など持たない女を歓楽街で拾って部屋に入れたのかもしれない。ともあれ、当時、絶望のどん底にあったゾラは、彼女によっておのれの孤独を癒すことができたろう。初めて女を知って、狼狽し、自分が変わってしまったことを後悔しつつも、彼女に熱中したろう。また、相手の境遇を憐れみ貧困を慰め合うこともできたろう。だから、彼は彼女を愛したにちがいない。しかも実体験が小説の契機となったとすれば、激しい嫉妬に苛まれるほど深く彼女に執着するまでに。しかし、同時に、ゾラは、互いの間にある精神と知性のあまりに大きな隔たりから、相手を嫌悪し相手を憎み、また返す刀でおのれを嫌悪し苦悩したことは容易に想像しうる。彼には相手を理解し愛する知性と情愛があっても、相手にはそれがない。女に必要なのは、おそらく寝場所と金と男であり、豊かな知性と感性を持つゾラという人間ではなかった。だから、ゾラの孤独は、彼女と一緒にいることで癒される一方、自分という人間が理解されえない孤独、求めても求めてもけっして求める愛が得られない孤独、要するに一緒にいながら彼女の中に自分が住みえない無念で耐えがたい孤独に苦しめられもしたにちがいない。

わずかの間にプロヴァンスの天国のような地から凍てつくパリの地獄へ移され、弱いがゆえに否応なく汚辱にまみれながら、それでもまだなお少年の清純な心を失いたくない独善的な魂、その魂が苦悩の果てにどこに行き着きうるか。『クロードの告白』はそのような魂の遍歴と終着地を示そうとした作品と考えられるが、そこには、純化の度合いはどうあれ、当時のゾラの現実と心の葛藤が赤裸々なまでに表白されていると見られる。

それにしてもその頃、ゾラはどうやって収入を得ていたのだろうか。生活に窮せば、おそらく母からわずかな金をせびることはできたろう。しかし、それ以外に必要な金をどうやって得ていたのか、日雇いのような仕事がたまにあったのか、一、二ヶ月ならなんとか忍ぶことのできる自分の蓄えを持っていたのか、そんな物持ちとも思えぬが、小説にあるように急場には古着や本を売って生活を糊塗していたのか。[注22] この貧困にあえいで

いた時期の、彼の本当の生活実態を教えるものは何もない。だが、ともかく、確実に推定できることは、この時、ゾラは、社会が何たるか、生きるとはどういうことか知っただろう、ということである。『クロードの告白』の中で、ゾラはこう書いている。

「兄弟よ、人生がぼくらにとって夢の中にあった頃を覚えているかい。ぼくらには友情があり、ぼくらは愛と栄光を夢見ていた。あのプロヴァンスの生温かい夕べのことを覚えているかい、星が瞬き始めると、ぼくらはまだ太陽の熱でゆらめいている畑の中に入って腰を下ろしたものだった。（……）君たちは君たちの夢を語り、ぼくはぼくの夢を語った。（……）ぼくは、自分には豊かな魂があると感じていたから、貧乏など平気だと考えていた。君たちも、ぼく同様、屋根裏部屋への階段を上り、偉大な思想を糧にして生きて行くことを望んでいた。（……）

兄弟よ、ぼくを叱ってくれ、ぼくを慰めてくれ。ぼくは生活を始めたばかりだというのに、もう悲嘆にくれている。ああ、ぼくの夢の中の屋根裏部屋はなんて白かったことか！（……）だが、本当の屋根裏部屋がどれほど醜いか、君たちは知っているだろうか？（……）この窓は太陽の光をぼくに当てようとせず、この床はじめじめしていて、この屋根裏部屋は砂漠だ。ここではぼくは愛することもできず、仕事をすることもできない。[注23]」

「ああ、貧乏は才能の母だなどと言う者たちは、なんて嘘つきなんだ！（……）心に傷を受けて涙があふれ出るなら、その涙の刻んだ皺は美しく高貴だ。だが、涙を流させるのが肉体の飢えなら、毎晩の最低の生活や畜生のごとき苦役のせいで涙が流れるなら、その涙が顔に刻む皺は、老人の苦労の果ての晴れやかさなど少しも感じさせない、おぞましいだけのものだ。[注24]」

彼は文字通り社会のどん底に身を置いていたのである。たとえ自己の文学的才能に対する矜持と希望を持ち続けていたとしても、ひととき女によって孤独を忘れられたとしても、現実には彼は身分も所属もない無為無業の者であり、金がなく、金を得る手段も見込みもなく、将来も全く見えず、ただただ日々貧しさからくる生きることの辛苦に、少しも気持ちが晴れることはなかったろう。唯一の楽しみはセザンヌがパリに来て一緒に生活することを夢想することであり、そのために彼を励ます手紙を書くことだった。そんなとき、ついに、実際にセザンヌが彼の説得に折れ、画家になる決心をしてパリにやってくることになった。ゾラには、彼となら、共に苦労を分かち合い、支え合って、将来に向かって生きて行ける、と、心に明るい光が差したに違いない。

ところが、セザンヌにとって、事情は、そういうわけにはいかなかった。彼には初めから確たる自信はなかった。しかもパリに来てみれば、パリは、自分を辱め、夢をますます委縮させる場所でしかなかった。しっかりしているはずのゾラも、仕事をわずか二ヶ月で辞めて、遊んでいた。しかも女まで作っていた。ゾラにはいつも金がないから、パンを分かつのも、ぶどう酒を分かつのも、たばこを分かつのも、もっぱらセザンヌの方であったろう。もちろん、セザンヌは、しばしば、ゾラの洞察力に感嘆し、知性の輝きに魅了され、二人の友情を無二の得難いものと感じることがあったに違いない。だが、セザンヌは、一生不自由がないと同時に、「いいかい、おまえ、将来のことを考えなさい。人は天才では食ってゆけないんだ。金がなければ死ぬんだよ」[注25]と言う、典型的なブルジョワ精神を持つ田舎銀行家の息子である。ゾラの当時の生活は、彼にとってけっして愉快でなかったに違いない。だから、セザンヌは、ゾラと現実に立ち戻った話になれば、きっと、暗に彼が早々と仕事を辞めたことを責め、しつこく「働くよう促し」たことだろう。そしておそらく、自分の帰郷をめぐって激しく争った最後の時には、セザンヌ家のブルジョワ的倫理観をふり上げて、ゾラを批判したに違いない。だとすれば、ゾラは、自分がセザンヌにまったく理解されていないと深く傷付き、絶望したこ

とは想像に難くない。彼が夢に描いた友情も、自分に「自分の場所 place」すなわち何がしかの社会的「地位 place」と金がなければ、現実には維持できない。心の底からわかりあえると思ったセザンヌさえも、何もなければ支えてくれない。彼にはやはり半年前と同じく、「ぼくには財産もなく、仕事もなく、あるのはただ失望だけだ。ぼくの近くには、ぼくを支えてくれようとする人など誰もいない」という気持ちが蘇って来たに違いない。

だが、ゾラは、結局、その絶望を世の現実として受け入れた。無理解だった友の気持ちも、友の心に消えずに残る純粋な友情に免じて受容した。それでもゾラは、和解を受け入れる手紙の中で、「君にはぜひ次のことをわかってほしい」と世間的には通用しないおのれの無為無業の理由を強調せざるをえなかった。「ぼくの強い希望、毎日毎日ぼくが考えていること、それは自分の場所を見つける、ということなんだ」と。この言葉こそ、ゾラの受けた傷の位置を指している。ゾラは無条件にセザンヌにわかってほしかったのである。そしてわかってもらえぬ無念をずっと抱え続けていたのである。自分はただ働かずに遊んでいたのではない、と。「自分の場所」はどこでもいいわけではない、と。自分がセザンヌを信頼しているように、ゾラはセザンヌにも自分を信頼してほしかった。しかし、銀行家の息子セザンヌには、ゾラの陥っていた境遇を本当に理解することはできなかっただろう。彼が味わった貧困の恐ろしさも、一方そこから脱するためにただ自分を殺して職に就くことの無間奈落も、一生涯生活に不安がなく無為が許される身には、ゾラの苦悩は実感を伴うものではなかったろう。ゾラは、仕事を探していなかったのではない。父の人脈を頼りに努力を続けていた。しかし、不適応な仕事がいかに人を苦しめるか知ったゾラにとって、物質と同時に精神をも満足させうる仕事を見つけることは、生そのものの問題ともいいうるほど切実であった。そのために、惨めさを抱えながら無為の貧困を耐

え忍ぶ必要があるのだということ、それをセザンヌにわかってもらい、支えてもらいたかった。だが、それは夢物語だった。

二人の間にある溝がいかに深いか、溝のこちらにいることがいかに鬱屈したものか、またこの溝を飛び越えることがいかに困難か、向こうにいる友には本当にはけっして理解し得まい、とゾラは、はじめから予知していたのかもしれない。あたかもそれを見透かすかのように、さきの文面に続けて、彼はアシェット書店に就職することになった旨を伝えている。そこには、ともかく自分は勤めることになった、だから安心してくれ、と言わんとする諦念がこだましているように思える。ゾラは、セザンヌに「わかってほしい」と訴えながら、結局諦めていたのである。また諦めなければ、自分自身、昔の友を友として取り戻すことができなかったのである。友情の持続には、互いに精神的に有為であると同時に物質的にも自立していることが必須条件である。そのごく当たり前の世間的常識が、自分たちの場合にも、何ら情状を顧慮する余地なく適用されるということ、それをゾラは現実として受け入れたのだった。

一八六二年夏、友情の危機を乗り越えて間もなく、ゾラは『クロードの告白』を書き始め、六五年十月擱筆した。これを出版するに当たって、彼は作品を二人の友セザンヌとバイユに捧げているが、献辞の冒頭でこう述べている。

「友よ、君たちは、今日ぼくが出版する手紙の書き手である哀れなこどもを知っていた。この子はもういない。彼は、おのれの青春の死と忘却の中で、大人になろうと欲した。[注26]」

小説にはセザンヌとゾラの友情の危機を反映する話はない。しかし、小説で展開されている愛と貧困、社会

と貧困、精神と貧困の問題は、小説のモチーフであると同時に、ゾラの現実のまたセザンヌとの友情の重いテーマでもあったはずである。クロードは「貧困はその周りの心を凍らせてしまうほど冷たい」と感じ、「貧困は悪徳の兄弟だ」と感じる。[注27] 貧困が人の生活と心にいかに猛威をふるうか、その物質的厳しさも精神的惨めさも、威力をまともに受けたゾラにしかわからない。温かい向こう側と凍てついたこちら側にあって、喜びを共有し、苦しみを共有し、そして夢を共有することなど、実際にはできっこないのだ、そうゾラは理解し、友の態度を容認した。結局、「ぼくを支えてくれようとする人など誰もいない」と愁訴しても、狂おしく求めても、何も持たない者の声はむなしく暗闇に吸いこまれるだけで誰にも届かない。そのように、セザンヌと訣別した後の深い孤独の中で、ゾラはおのが境遇を静かに厳粛にそして冷徹に受け入れたのである。

こうして、セザンヌとゾラの友情は、ゾラの青春の墓標の上に再生していった。

（つづく）

注

注１　ゾラ自身は一八六一年十二月帰化申請し、六二年十月フランス国籍を得ている。

注２　*Paul Cézanne Correspondance*, Les Cahiers Rouges, Éditions Grasset, 2007, p.21, 1859.04.09

注３　iibid., p.81, 1860.02.09

注４　ibid., p.104, 1860.06.25

注５　ibid., p.87, 1860.03.25

注６　Ambroise Vollard, *En écoutant Cézanne, Degas, Renoir*, Les Cahiers Rouges, Éditions Grasset, 2003, p.207,

注７　op.cit., pp.87-88, 1860.03.25

注８　ibid., p.88, 1860.03.25

注 9　ibid., p.91, 1860.08.16
注 10　ibid., pp.92-94, 1860.04.26
注 11　ibid., p.122, 1861.06.04
注 12　ibid., p.123, 1861.06.04
注 13　ibid., p.123, 1861.06.04
注 14　ibid., pp.97-98, 1860.05.14
注 15　ibid., p.77, 1859.12.29
注 16　ibid., p.124, 1861.06.10,
注 17　ibid., pp.124-125, 1861.06.10,
注 18　ibid., pp.126-127, 1861.08
注 19　ibid., pp.131-132, 1862.01.20,
注 20　ibid., p132, 1862.01.20
注 21　ibid., p.81, 1860.02.09
注 22　Émile Zola: *La confession de Claude*, La Bibliothèque électronique du Québec (Édition de référence: Paris, C. Marpon et Flammarion, 1880), p.129
注 23　ibid., pp.25-29
注 24　ibid., p.55
注 25　op.cit., *Correspondance* p.79, 1859.12.30
注 26　op.cit., *La confession de Claude*, p.19
注 27　ibid., p.32